

## テモテ第一の手紙6章11-21節 「偉大な王への奉仕」

### 1A 信仰の戦い 11-16

#### 1B 敬虔の目的 11

#### 2B 永遠の命の目標 12-16

### 2A 今ある富の教え 17-19

### 3A ゆだねられた教え 20-21

## 本文

テモテへの手紙第一6章を開いてください。私たちはついに、テモテへの第一の手紙を読み終えます。パウロは、手紙の中でこれまでテモテに教えてきたことを、まとめるようにして最後の指示を出します。

### 1A 信仰の戦い 11-16

パウロは、これまで敬虔にかなう教えとして、テモテに具体的なキリスト者として生きる指針を伝えていました。例えば、6章の初めには、「くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。」と教えています。このように、主に似た者として生きる教えを行なっているのですが、テモテが牧会者として置かれているエペソにおいて、そうした教えに同意しない者たちがいたことを覚えていますね。3-6節を読んでみましょう、「違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまつて真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。」

キリストが罪人のために来られて、私たちを救い、そして神は私たちをご自分の性質にかなう者としてくださるというご計画があります。私たちは良い行ないによって救われませんが、良い行ないのために救われました。神の作品として私たちは選ばれて、神の恵みのすばらしさがいかようなものであるかを表現するために、私たちを召してくださいました。1章5節で、「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を目標としています。」とありましたね。

ところが、エペソにある教会には、それを目的としない輩が教会の中に忍び込んでいました。違った教えをして、空想話や系図などの話に陥り、律法について知っているかのように振る舞っているが、自分で何を言っているのかわかっていないとパウロは1章7節で話しています。そして今読んだ、4節において、こういう者たちは高慢になっていて、言葉の争いをしたりする病気にかかっていると断じています。それからパウロは、このようなことをしている人々には、さらに「敬虔を利得

の手段と考えている人たち」がいるとっています。キリスト教会の中で、いつの間にか世の中の経済原理が働いてしまう誘惑です。必要以上に献金を要求したり、何かを高価な値段で売りつけたり、多くの献金をしている人に良い待遇をしたり、何よりも自分自身が教会の奉仕の名の下で富んでいくこと。こうしたものに対して、10 節、「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」

## 1B 敬虔の目的 11

そしてその中で、パウロは対比して、テモテはこれをしなさいと命じています。

11 しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。

「しかし、神の人よ。」とっています。対比ですから、先ほど話した人々というのは、世の人ということですね。この世において、言葉による争いがあります。この世において金銭への愛があります。しかし、あなたは「神の人」であると言います。これは、アブラハムに、ダビデに、その他、敬虔に生きようとしていた人々に付けられた呼び名です。

そして、「これらのことを避け」なさいとっています。敬虔を利得の手段とするような動きであるとか、言葉の争いであるとか、そのようなものから避けなさい、とパウロは言っています。これは、一見、消極的なようであるが、積極的です。多くの人が、問題があるとその問題を打ち消そうとやっきになりますが、問題に注目するのではなく、元々やるべきことに集中することです。

それが、「正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。」ということです。次に、私たちの信仰は戦いであることをパウロは話していますが、何が戦いかと言いますと、最も大事なことを最も大事なままにすることの戦いです。二次的なこと、三次的なことを主目的にしようとする、あるいはいつの間にかやっていることの性質を変えてしまう力が強く働いています。

そこで、これらのことを「熱心に求め」る、という積極性、能動性がとても必要になってきます。「正しさ、敬虔」というのは一括りにできます。テモテへの第一の手紙では、公の活動としての教会、不信者も見ている中での教会を意識して書いています。ですから、人との関係としての「正しさ」がなければいけません。それから、神に対する関係については「敬虔」と表現されます。それから、内なる姿勢や心の動機です。「信仰、愛、忍耐、柔和」です。信じるという能動性があり、それが愛によって裏付けられたものであり、そして愛と信仰には忍耐が付き物です。そして、人との関係において相手から何かされたとしても、敢えて仕返ししない柔和さも必要です。これらが、主目的であり、第一のものとし、最優先にしていけます。

## 2B 永遠の命の目標 12-16

12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。

信仰を戦いとしてパウロは表現しています。これはパウロが、「命じます」「命令」という言葉を多用していることから、よく分かります。この手紙の冒頭には、「私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから」とありました。神とキリスト・イエスとの命令で、パウロは自分が使徒となったと言っています。そしてそのパウロが、テモテに命令しています。つまり最高司令官がイエス・キリストでその指令をパウロがテモテに伝達しているということになっています。

ここにおいて、私たちは神の召しについて、また戦いについてしっかりと知っていかなければいけません。キリスト者生活は、自分が信じて救われたのですが、選ばれたのは神ご自身であり、そういった意味では私たちの自主的な働きではないのです。神が選ばれて、神に呼ばれたから、今の自分がいます。このことが分かれば、キリスト者の生活は全て変わります。信仰生活も、教会生活も自分から始まるのではなく、全て神から始まります。そして自分が責任を負うことは、とても少ないです。主から命じられたことを守り行なえばよいのであり、その他のことは全て主が責任を取ってくださいます。教会は、自分たちのものではなく、主ご自身のものであり、私たちではなくキリストが満ちておられるところであり、私たちはその体としてこの方が生きているのを目撃し、体験していくのです。ですから、そこで必要なのは、自分の頑張りではなく、へりくだりであり、忠実さなのです。頑張るのは主ご自身であり、私たちは、この方の御霊の中に留まるのです。

そして、さらに神の働きに従事するということを考えると、「招集された兵士」という関係になっていきます。テモテへの第二の手紙でパウロは、こう言いました。「2:3-4 キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」主が私たちを徴募した方であり、この方の者になっており、私たちは自分の意志をこの方に明け渡して、この方の命じられることのみを行なっていく、という献身が必要になります。

「永遠のいのちを獲得しなさい」とパウロが言いました。この永遠の命について、私たちは信仰を持ったら神からの賜物としていただくもの、と考え、もう与えられているものと考えています。その通りです。御子がおられたら、そこに命があり、私たちのキリストがおられれば永遠の命は与えられています。しかし、その中に留まる、キリストを湧き水の泉のように源にして生き、永遠の命に至る生ける水が湧き出るようにしておくということには、戦いが生じるのです。キリストにある神との生ける関係の中にいることによって、初めて私たちが何かを行ない、何かを語っていきます。しかし敵は、私たちがキリストを源とするのではなく、そこから離れたところに源を求めするように仕向けしていきます。エレミヤ書で学んだように、壊れた水溜のところで水を飲むように仕向けます。それを

拒み、キリストのみによって生きること、これを固持すること、保持することが私たちの務めです。

そして、その至る所、目標地点というのは、次に出てきますが、キリスト・イエスが王の王として現れて、神の国が到来することです。その時まで、霊的な御国が私たちの周りに広がります。そこが私たちの信仰の戦いの現場であり、サタンの支配するこの世に、攻め入り、制圧していくように召されているのです。ですから、戦いというものが何なのかを知る必要があります。戦いというのは、「殺さなければ、殺される」というものです。悪や敵に対して、仲直りしては決していけないのです。そうすれば、自分が殺されます。相手は、自分たちを殺し、滅ぼすことしか考えていません。自分たちを全滅させることを意図している者たちに対決しているのです。「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によってからだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。(ローマ 8:13)」したがって、私たちは何が敵であるかを見分けることが必要です。そして、「攻撃は最大の防御」と言われるように、徹底的に先手を打って敵を攻撃することによって、私たちは救われます。ですから、私たちはまず、自分たちは戦う者なのだという覚悟を決めることが必要であります。

そしてパウロは、「あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。」と語っています。多くの証人の前での立派な告白とは何を意味するのか意見が分かれますが、ある人は按手の時であろうと言います。ある人たちは、水のバプテスマであると言います。いずれにしても、永遠の命に至るキリストを信じる信仰告白を、多くの人で行った、つまり、信仰を公にしたということです。当時、水のバプテスマに代表される公の告白は、反対や迫害、時に殉教をも意味するものでした。しかし、それでも言い表すことによって私たちの主は私たちの内で生きて働いてくださり、聖霊の力が現れるのです。「ルカ 12:8-12 そこで、あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。たとい、人の子をそしることはばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

13 私は、すべてのものにいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスとの御前で、あなたに命じます。

パウロは厳かに、テモテに対して命じます。父なる神とキリスト・イエスの前で命じると言っています。父なる神については、「すべてのものにいのちを与える」と、そして、イエス・キリストについては、「ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされた」と言っています。ここには、十字架の死に至るまで忠実であったキリストと、それでも死なれたキリストを甦らせた生ける神の姿が出ています。永遠の命のために、その信仰の戦いにおいて、もしかしたら死にまで至るかもしれ

ない、そうした恐れがあるかもしれないけれども、それでも死にまで忠実であったキリストが先駆者としておられ、そして死んでもキリストにあって甦らせてくださる父なる神がおられるということです。イエス様のすぐれた告白というのは、ピラトの前で、ご自身がユダヤ人の王であること、この十字架刑は父から来たものであることを告白し、また訴えられても言い返されなかったこと等もあります。テモテは、多くの証人の前で告白をしましたが、キリストがその告白の模範となったださり、この方に付いていくように召されているのです。

14 私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。

パウロは手紙の冒頭で、「私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令」によって自分が使徒となったと言いましたが、その望みとは、「主イエス・キリストの現われ」のことです。キリストが戻って来られて、現れてくださる時まで私たちは堅く、信仰を守り、あきらめないのです。イエス様は、目を覚ましていさい、用心していなさいと言われて、いくつかの喩えによって、そのことを教えられました。僕たちに時間通りに食事を与えている思慮深い僕なのか、それとも「主人はまだ来ない。」と言って、僕たちを打ち叩いている者なのか、また主が来られることを考えている賢い乙女は、油を用意していましたが、そうでない乙女は主が来られてから買いに行こうとして、主の到来に用意ができていませんでした。しっかりと、主の到来を忍耐して待っているのです。

そして、それまでの間、「あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。」と命じています。これまでテモテに命じたことをしっかりと守っていなさい、ということです。そして、内面においても傷、つまり罪や悪が留まっていることがないように、公においても、人々の目に見えるところで、非難されるところのない者であるようにいなさい、と言っています。主が再臨されることについて、パウロはテサロニケ人への手紙でも、ピリピ人の手紙でも、私たちが傷がないように、純真であることができるようにと祈っています(ピリピ 1:10、1テサロニケ 5:23)。

15 その現われを、神はご自分の良しとする時に示してくださいます。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16 ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものであります。アーメン。

なぜ、主の現れを私たちは熱心に待ち望むべきなのか？それは、これだけ偉大な王が戻って来られ、この偉大な王に私たちは仕えていることを思い起こすことができるからです。当時、彼らが生きていたのはローマ帝国であります。ヨーロッパ、中東、北アフリカの全域を支配していた巨大な帝国です。皇帝は、救世主と呼ばれていました。また神の子と呼ばれていました。皇帝こそが、我々を救い、皇帝が平和の君だとみなされました。しかし、それを真っ向から否定し、はるかに偉大で、優れた主権者がおられ、この方が現れ、この方に仕えているからです。

ところで、15 節、「神は祝福に満ちた唯一の主権者」となっていますが、これは、「主イエス・キリスト」から続いているので、「主イエス・キリストは」と訳すこともできます。キリストは神の本質の完全な現れですから、キリストが来られることによって神が来られると言っても、もちろん構いません。一つ一つ、呼び名を見てみましょう。「祝福に満ちた唯一の主権者」であります。この方は祝福に満ちておられます。先ほど、この世における富を愛する者たちがいるということができてきましたが、いいえ、この方こそが祝福の源です。それから、「唯一の主権者」であります。この世には王と呼ばれる者たち、指導者、主権者と呼ばれる者たちがいます。しかし、この方のみが全てを支配されている方です。また日本は主権在民ですから、自分が主権者です。だからこそ、唯一の王という宣言は、私たちが自分の権利の一切を、この方に明け渡す意識的な選択が必要だということです。さらに、「王の王、主の主」とあります。これは、どんな世界帝国の王が世界を牛耳ってしようとも、その王はまことの王の操り人形でしかないことを意味しています。さらに、イエス・キリストが王の王、主の主として現れる時は、この方の主権に歯向かう者たちをことごとく打ち滅ぼされることを意味します。

「ただひとり死のない方であり」とあります。数々の王は、どんなに権勢を誇ろうとも滅んでいきました。しかしこの方は不滅であります。そして、この方に望みを置く者も、死んでもまた生きることができます。そして、「近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方」と言っています。主の栄光の御座があります。そこには誰も近づくことができません。幕屋の至聖所は、天を模ったものですが、そこも大祭司が年に一度入れるだけでした。そして、人間が誰一人見ることができないという点も大事です。「神を見た」という人がいますが、いいえ、それは嘘です。父なる神を見た方は、唯一、主イエス・キリストしかおられません。「ヨハネ 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」このように、私たちはとてつもない栄光に富んだ神に仕えています。

## **2A 今ある富の教え 17-19**

17 この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。

パウロは、金銭を愛することについての話に戻っています。かの世には、とてつもない栄光に富むキリストが現れてくださり、私たちはこの方を望みとして生きているのですから、この世における富に望みを置くべきではない、ということです。戒めとして初めに、「高ぶらないように。」と言っています。富というのは、私たちが何かを持っているという高ぶりを生じさせます。これは必ずしも、多くの金額だけを意味しているのではなく、安定した収入、そして自分の収入に応じていつも計算しているということも含まれます。イエス様が、神の国とその義をまず求めなさいと言われたからです。イスラエルの民が荒野の旅においてマナが日々与えられたのと同じように、自分もその所得はもっぱら神からの一方的な憐れみなのだということを知り、主の臨在を感じ、神に感謝していること

が必要です。

それから、「たよりにならない富に望みを置かないように」と言っています。先ほど説明したように、主が現れることを望みとしているのであれば、私たちは富についての思い煩いから解放されます。第一のもの、正しさと敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を求めることができます。そして、「私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」とパウロは勧めています。これは大事ですね、神は私たちを決してひもじい思いをさせることはなさいません。むしろ、貧しい中においても、富んでいても、あらゆる境遇において、主の豊かさを楽しむことができる、その秘訣を教えてください。私たちは主に仕える中で、この世においても確かに与えられた分によって、それを楽しむように恵んでくださっています。

18 また、人の益を計り、良い行ないに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。

ここは、キリスト者の財産に対する姿勢です。自分に任されている財産は、自分が楽しむことができるものであるけれども、それを人の益のために用いていくことは大きな喜びになります。福音の働きのために捧げること、また慈善行為に捧げることです。「惜しまずに施し、喜んで」とありますね。どうやって使っていくか、どのように分け与えていくかということに、熱意や喜びを感じることはキリスト者の特権であります。

19 また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。

私たちの将来設計の話をしています。大抵、老後設計までをするのがこの世であります。しかし、キリスト者は老後の先、「まことのいのち」のための設計を立てます。この未来があるので、今の内に良い基礎を築き上げていくことに力を入れるのです。ですから、私たちは神の御国という幻が、何となくあるものという希望的観測ではなく、現実のもの、間もなく来るものとして用意していく必要があります。

### **3A ゆだねられた教え 20-21**

20 テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「靈知」と呼ばれる反対論を避けなさい。

これがこの手紙での、最後の勧めであり、まとめであります。「ゆだねられたものを守りなさい。」であります。テモテは、新たに何かを造り出す必要はありません。守るだけあります。神から、キリストからゆだねられたものを守るだけです。主イエス・キリストの福音、神の救いのご計画について、それを純粋に守り、維持し、保持するだけです。なぜなら、私たちが何か生み出すのではなく、まさに福音そのものから、永遠の命に至る生ける水が湧き出るのであって、また神の御国の力の

現われがあるのであって、私たちの役目は福音を福音として、無傷のままにしていこうということがあります。私たちは恵比寿パブルスタディにて、ガラテヤ書を学んでいます、福音に加えて何か、聖書に加えて何かがあると、その福音そのものが異質なものになります。

違った教えとして、エペソに入り込んでいたのは、「俗悪なむだ話、また、まちがって「靈知」と呼ばれる反対論」でありました。ユダヤ主義、つまり律法主義という偽りの教えがありました。それから、聖書の話を超えた憶測だけで語る作り話がありました。それから、ここにある「靈知」と呼ばれるグノーシス主義です。グノーシス主義あるいは靈知主義は、「私たちには神からの知識が特別に与えられていて、他の者たちには明らかにされていない。」とする、靈的エリート主義であります。元々の考えは、神は肉体には関わる方ではなく、霊と肉を分離する二元論です。例えば、結婚や性的な関係は神から離れたものです。食べることも神から離れたことです。これらを汚れているとして、結婚を禁じたり、ある物を食べることを禁じたりします。ユダヤ主義でも、食べ物については食物規定においてやりますね。あるいは極端に、肉体に関わることは神との関係に関わりがないのだから、何をやっても構わないという快樂主義です。

21 これを公然と主張したある人たちは、信仰からはずれてしまいました。恵みが、あなたがたとともにありますように。

一見、もっともな教え、福音よりも優れているように見せている教えであります。けれども、キリストの福音から離れる、信仰から離れることとなります。これらを避けなさいとパウロはテモテに教えています。

そして最も大事な真理、「恵みが、あなたがたとともにありますように。」とあります。神の愛、その一方的な好意、良くして下さること、その祝福こそが、私たちを健全な教えの中に留まらせることができます。